



大阪教区 シノドス意見聴取のまとめ【別紙】

2023年に行われるバチカンでのシノドス(世界代表司教会議)の準備調査として、各教区に送られた意見聴取の質問票(4月末最終締め切り)。大阪教区ではシノドス担当チームが回答を集計し、担当司祭であるヌノ・デ・リマ神父が5月18日の司祭評議会で報告、承認を得た。このまとめは司教協議会に送られ、全国16教区から提出された回答とともに、日本語のまま教皇庁シノドス事務局に提出される。また、7月の臨時司教総会において日本の教会としての回答をまとめ、それを教皇庁に提出することになっている。以下、全文を掲載する。

A. はじめに

質問票への回答は約330件になりました。これは、小教区の評議会などからのもの、個人からのもの、修道会からのものを合計した数です。協力していただいた皆様に、ありがとうございましたとお礼をお伝えします。本来ならば分かち合いをしていただきたかったのですが、集いを開いてその内容を回答していただいた事例は少なかったようです。ただ、分かち合いをして報告していただいた小教区では多い機会と報告されています。

男性と女性の回答の比率は女性が約7割でした。年代別では60～70代が多く、全体の7割くらいを占め、30～40代の人からの回答は少なかったです。それぞれの質問に対して回答をたくさん書かれた方もおられましたが、その反面、質問の内容を難しく感じられた方も少なからずおられました。

回答の傾向としては、似た内容や方向性の回答が多く見られ、いずれも教皇フランシスコが望んでおられる「ともに歩む教会」の再構築に向かうものであったと言えます。世界中の教区でシノドス(世界代表司教会議)の準備として現状を振り返り、その積み重ねで来年のバチカンでの会議につなげていくという大規模な取り組みは、今まで経験したことのない画期的なものでした。

シノドス事務局から提示された10項目の質問は、教会においてどのくらい「ともに歩む」ことができているのかを振り返り、今後さらに前に向かうための糸口を探るように構成されています。質問項目自体が教会本来のあり方を実現することを目指しています。

質問は大きく3つに分けられます。最初の1～4項目は、ともに歩んできたことを問い直します。5～7項目は、どこまで教会が開かれた関わりができてきたのかを振り返り、8～10項目は、教会がさらに本来の姿を実現することができるかを提起しています。現実を振り返り、広がりを求める視点を受け止め、教会が教会であるための欠かせない要素を探求して実現するように促しています。

では、質問項目ごとに報告された特徴的な内容を紹介します。

B. 質問項目ごとの主な意見

番号後の文章は、シノドス担当チームのまとめです。その後の「●」は個別の意見から印象的なものを書き加えています。

1. とともに歩むことに関して

深い出会いの体験、分かち合いの大切さ、出会うことが可能な場の存在、開かれた関わりが存在などが多く指摘されていました。信徒養成での新しい視点、活動を共にすることでの支え合いなどの指摘もありました。

その一方で、主任司祭と信徒の断絶、司祭の権限としてすべてのことに決定権を行使する現実などを嘆く声もありました。

- 教会を去ってしまった人の痛みは私たちの痛み。
- 教会から離れている人の意見はここにはない。初めて来た人に対して淡泊ではないか。
- 小教区内の組織の再編が必要。昔ながらの壮年会、婦人会などを改変した小教区もある。
- コロナ禍の厳しい状況においては、病者などに電話をすること、手紙・教会だよりを郵送するなど、何らかの形で届けるとよいのではないか。

2. 交わりの現実について

個人的な努力として、自分から声をかけるようにしている人たちがおられます。奉仕的な活動など、信徒同士のつながりがある人は仲間がい



ともに歩む教会のため
交わり | 参加 | 宣教

るのに対し、特に活動していない場合はつながりの機会が得にくいようです。まずは、挨拶し合う雰囲気が根付くように意識的に励むことが大切なようです。

- 元気で健康な人たちの声ばかりが目立っている。
- 10の質問の点字訳は作成できなかった。外国語訳も日本に來られている各国語の人びとにお聞きしたかったのですが、一部の国にとどまった。外国人とのコミュニケーションが十分にとれない難しさを実感。
- 小教区の中に気楽に声をかけられる相手が2～3人いるとよい。典礼などの奉仕活動をきっかけにしたり、洗礼の代父母にも橋渡しをしてもらったりする。

3. 発信することについて

地域社会の活動に参加している個人はかなりおられるようですが、小教区としてはあまり地域との関係づくりをしていないところが多そうです。地域とのかかわりの必要性に気づいていなかったようです。今後の課題です。

- 職場とは違う地域的なつながり。教会を地域に開放してはどうか。教会が地域の子供たちに自習室を提供するなど。
- 子ども食堂の開設。フードロスを防ぎ、援助が必要な家庭に食料品を配布する奉仕を引き受ける。
- 地域で活動している人を支える仕組み。個人の活動を教会として支える。
- 小教区共同体の枠を外して考えることが必要。社会の状況、その必要性に合わせて、出来ることを考え積極的に市や町、地域住民のニーズに応える行動力を発揮できないか。

4. 典礼の実際

一部の人がずっと担当している小教区が多いようです。役割が固定化しないように、任期制を採用する提案がありました。奉仕職が信徒の序列のようにになっている弊害の指摘もあります。わかりやすい交代の仕組みがあるとよいのでしょうか。

- 奉仕者が不満に思わないような配慮を講じた仕組み作り。クリスマスや聖なる三日間の典礼など、大きな意義を持つ典礼では経験豊かな人を優先的に奉仕者に充てて、普段から奉仕している人が経験する機会を持たない小教区がある。
- 任期制の導入。3年やったら3年お休みなど、交代する仕組みが必要では。
- 典礼参加者が神様との出会いに招かれていくように、典礼奉仕者ができる貢献について探求することが大切では。
- 教皇様が来日の折に、司祭の説教について言及されたようですが、心に届く説教をしていただきたい。眠くならないものを。
- ミサの15分前に着席し、1週間を振り返り、反省を次週につなげるように、また世界のニュースを思い起こしながら開祭までを過ごすことが大切。
- 大阪教区の新生計画で実施されていた「若い人のミサ・キャラバン(若い人が参加しやすいミサをあちこちで行う)」を実施してはどうか?

【裏面に続く】